

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

今を生きるストリート・エスノグラフィーの実践：
すれ違う権力のまなざしとストリートのまなざし：
社会環境を映し出す身体：見えにくい闘争の場所：
ストリートに育まれる身体：
チリ・サンチャゴ市の「貧困空間」から

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 内藤, 順子
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00001235

社会環境を映し出す身体 ——見えにくい闘争の場所

ストリートに育まれる身体 チリ・サンチャゴ市の「貧困空間」から

内藤 順子

日本学術振興会特別研究員 PD・日本女子大学

貧困者が生活の拠点とする貧困地区とは、「貧困のハビトゥス」（暮らしと環境に見合った動作や身体知、身体配慮）を身体化させる環境であり、そうした身体によって形作られたものでもある。そこは、環境に適応した身体的・感覚的要素を強固にする循環があるために閉じているように見えるが、じつは閉じることのない貧困空間の母船のような場所と考えられる。グローバル化がすすむにつれて、貧困者は生活拠点ではない富裕地区へ資源を求めて出てゆき、浮遊するかのように都市を覆う。貧困は、母船から伸びたアメーバの偽足のようなものとしてイメージされる。

そのように都市の貧困と貧困者をとらえたうえで、貧困の母船地区はどのような歴史的深度をもって形成され、そこで多くの時間を過ごす人びとはいかなる身体性を育んできたのかを考えたい。それは貧困の母船地区の文脈と、そこに入り込んでくる文脈をつぶさに見てゆくことでしか可能にならない。われわれの未来が過去、現在と切り離せないように、貧困母船地区で多くの時間を過ごす貧困者もまた同じように切り離せない過去、現在、未来という時間の流れのなかに生きている。その当たり前の生の多様さや複雑さ、彼らの暮らしの文脈や「環境世界」をあらためて見なおし、ストリートに育まれる身体と、共同性の場であり暮らしの準拠枠であるストリートとに焦点をあてながら、チリにおける“「貧困」の問題”を問い直す。

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none">1 はじめに2 チリにおける「貧困」問題<ul style="list-style-type: none">2.1. 「連帯」という思想2.2. 上からの「下からの視点」
——‘善意’の意図せざる暴力性2.3. しあわせの外部性
——「第一世界」の文脈の侵入 | <ul style="list-style-type: none">3 「貧困空間」の人類学
——浮遊ゾーンと沈殿ゾーン<ul style="list-style-type: none">3.1. 貧困が沈殿する空間のハビトゥス3.2. ストリートで育まれる身体3.3. 「ある世界」と「あるべき世界」
——人はどこから来て、どこへ行くのか4 ストリートに交錯する「環境世界」5 おわりに |
|--|--|

キーワード：貧困空間、複数の文脈を生きる、貧困濃度（浮遊／沈殿する貧困）、「環境世界」、チリ

1 はじめに

チリの首都サンチャゴ市の路上では日々、貧困者¹⁾たちの生業^{なりわい}が繰り広げられている。ここ数年で上流地区に乱立しはじめたカフェで流行のサラダ・ランチをする富裕階級の女性たちの傍ら、自治区が極貧層²⁾向けに斡旋する超短期アルバイトのユニフォームをきた人が道を掃いている。オフィス街のビルに出されているダンボールをリヤカーで収集して廻る人がある。家政婦の仕事を終えてスラムにある自宅へと戻る道すがら、乗り合いバスを待つ暇つぶしに物乞いする人がある。あるいは、道端の緑を保つために設置された、高級住宅街ならではのスプリンクラーから10ガロン級のボトルいっぱい水に水を注いで、自宅用と近隣に安価でわかる用に持ち帰る人がある。ピエロ風の衣装をまとった青年は、信号が赤に変わると車道に躍り出て大道芸をはじめ。高級レストランにやってくる車の駐車誘導を自発的に請け負う人たちは、車主が戻るまで番をして、ハンドルが熱くならないように日除けのサービスも怠らない。物売りは、飲食物や農産物といった定番商品に加えて旬のものを扱う。独立記念日前には国旗、ローマ法王逝去の際は法王のプロマイド、日本の女子高生ファッションで一世を風靡したロシア人デュオTATOOの、遅れてやってきたブームに乗じたルーズソックス、ビリーズ・ブート・キャンプの海賊版、オリンピックの非公式グッズ、ハロー・キティならぬアロハ・キティ……。彼らの、グローバリズム下の流行にたいする敏感さは目を見張るものがある。これらの様ざまな都市雑業は貧困者たちが編み出し、いうまでもなくグローバル化とともにあり、しかしながらローカルに根ざした趣向とニーズを汲みとっては、素早く消え、新たにうみだされ、工夫を重ねて部分的に競争社会に顔を出しつつ続けられもする生業だ。彼らにとって都市のどこでもが暮らしのフィールドである（写真1、写真2参照）。

貧困者は都市内部を縦横無尽に移動し、都市は貧困に覆われる。貧困は浮遊するかのよう漂い、ある場所では沈殿し、貧困者はその浮沈の濃淡を織りなすアクターでもある。かれらの都市における経験は、彼らの身体が「都市化」するプロセスともなる。都市化といっても、進歩史観的な文明化ではなく、都市に見合った身体のかたをすること、都市に育まれている、ということである。詳しくは本稿をとおして試論するとし、この彼らの身体を育むサンチャゴの都市空間を「貧困空間」と見たてたい。現象する「貧困空間」の詳察によって目論むところをより説明するには、次の引用が適切だろう。

「都市の理論化とは、われわれが生きているポスト工業化、高度資本主義、ポストモダン期の変化を理解するのに欠かせない一部である。日常的実践の現場としての都市は、そうしたマクロなプロセスと人間の経験の織りと肌触りといった様ざまな結合について貴重な見通しを与えてくれる。都市とはそうした結合が見られる場であるだけでなく、それらのプロセスと人間への影響が強く現れるところであり、そうした結合がもっともよく理解できる、そういう場なのだ。“都市”とは、都市生活の日常的実践の文化的で社会・政治的なあらわれの具体化ではなく、それらのあらわれが焦点を結ぶ場なのである。」（Seta M. Low 1996: 384）

ロウは上述の都市研究以前に、中米のネルビオスといういわゆる民俗病についての論考において、世界各都市での病み方の比較をとおして、それが社会政治的背景をもって身体に現象するということを論じている (Low 1994)。個人の身体感覚の間文化的な多様性が苦痛についての社会政治文化的状況と相関する、というその主張がこの引用研究の下敷きとなっているとすれば、ここでいう「人間」を「身体」とおきかえて差し支えないであろう。彼女は「身体は自己と社会の気まぐれな仲介者である」ということも示しており (Low 1994: 157)、それは貧困者が都市においてするグローバル化に連なる経験を身体化するうえで取捨選択し、作り変えたり、飽きたりしながら「気まぐれに」(しかし人の日常としてはあたりまえの) 暮らしを営む現実とも通じる。而して、サンチャゴで現象する「貧困空間」における身体がいかなるものであるか、とりわけ都市のストリートにおいて育まれる貧困者の身体について、マクロなプロセスと肌感覚との相互関係に注目して述べていきたい。そしてこの考察によって、チリにおける「貧困」³⁾をめぐる問題を問いなおす一端としたい。

2 チリにおける「貧困」問題

2.1. 「連帯」という思想

サンチャゴ市は国の人口の約半数が集中し、世界資本が集まる金融市場としての機能を果たす大都市である。いまや南米でいちばん物価水準が高く、アメリカ合衆国を 100 とした場合に他の南米 10 カ国の平均が 46.3 であるのに対し、60 をマークしている。サンチャゴの街の形成は 1818 年のスペインからの独立後しばらく経った 1930 年頃からだ、劇的に変化するのは 1970 年前後である。それは新社会主義政権樹立を契機にしており、貧困の急増もこの頃に始まった。その後のクーデターや軍政の経験と民主主義への移行といっためまぐるしい政治的変化のなかで、貧困の解消は社会問題としてありつづけてきたが、政治的ツールとして引き合いに出されるにすぎなかった。はじめて貧困を数量化した研究は 1950 年代半ばに見られるものの (GAMBI 2005: 39)、いわゆる都市型の貧困問題としてクローズアップされるようになったのは 1980 年代からである。ただし、軍政下 (1973–1988) では政策批判に制約があったため、本当の意味での貧困研究と対策の開始は 1990 年代を待たねばならなかった (GAMBI 2005: 41)。軍政終了後最初の米州サミットが 1994 年にアメリカ合衆国で行われ、その折に (1)「民主主義の定着」(2)「経済統合と自由貿易による繁栄」(3)「貧困と差別の撲滅」(4)「持続可能な開発」の 4 つが地域全体の目標として掲げられた (浦部 1996: 31)。このときチリは再民主化の波にあり、1994 年に誕生したフレイ政権では (1)「近代化」(2)「民主化」とともに (3)「貧困克服を政権課題の柱にする」という政策を進めた⁴⁾。

チリでは貧困についての研究⁵⁾と実際の介入とが当初から同時進行しており、その手

本は国連開発計画や世界銀行などの指針だった。したがって、貧困問題を扱う文書では公私を問わず、世界標準の決まり文句や流行語である「社会的排除」「権利」「統合」「連帯」「人間開発」「資源の欠如」「倫理」「社会的公正」という単語がならぶ。それは同時に、「貧困は撲滅すべき悪である」という「貧困」概念が先立っていることも意味している。チリにおいては、社会的現実として空間的にも接触可能な貧困者をいかに減らししていくかが課題であり、社会防衛の観点から貧困は問題化されている。

「チリは極貧から解放されるのだ。もう誰も、生きのびるために他人の施しに頼るような恥ずべき行為や屈辱に身を委ねることはない。(中略) 不利な状態を生きてきた同じチリ人の兄弟たちに、連帯と寛大な手を差し伸べたい。だからこの新しい政策“チリ国家連帯 (*Chile Solidario*)”について話そう。われわれの歴史のなかではじめて、貧困の中でもっとも貧困な人びとにも、厚生と教育、社会保障へのアクセス (権利) が保障される。チリはまさしく連帯を築くのだ。」

これは2002年5月21日に行われた“チリ国家連帯計画”(極貧層を対象とした社会保護政策)の開始を祝う大統領演説の一節である。ここでは、その領域内の人々は明らかに「救うべき存在」として位置づけられている。こうした政府筋の貧困への姿勢は、国内における取り除くべき異物といった表象に集約されるだろう⁶⁾。「連帯」や「統合」とは、近代国家の国民は一体であるべきだという思想にもとづいており、一体化するには彼ら貧困者を「われわれレベル」まで引き上げなければならず、だからこそ寛大にも手を差し伸べるのだという論理であるが、その理念もまた「貧困」概念の増幅につながっている。たとえば、「人間開発」といって貧困地区で生活援助活動を進めることは、本来の人間開発の意味から離れて、ローカルの文脈では、貧困者が「人間的に未開発な人びとである」と公言しているのと同じように受けとめられる。たしかに政府にとっては、貧困の克服は、寛大にも手を差し伸べることから始まるのだが、その場合、貧困者が享受すべき権利とは、一方的な統合と支配に組み込まれることとセットになっている。貧困地区では出生届や居住場所などを把握できない状況が多く、そうした「内なる辺境 (*Fronteras Interiores*)」⁷⁾をいかに統合してゆくか、それがチリ政府や貧困外部にとっての貧困問題なのである。

こうした視線のもとで、チリにおける貧困率は1990年から現在まで、数値の上では改善の一途をたどってきた。国勢調査⁸⁾によると1990年では貧困層が国の総人口の38.6%を占めていたが2000年には20.6%まで減少し、最近発表された2003年調査の結果では18.8%となっている。その内訳は14.1%が貧困層、4.7%が極貧層である。1990年から2000年にかけての大幅な減少については、この期間のチリ全体の持続的な経済成長が反映されているという見解を政府は示しており、これは国内外の経済学者たちの見解とも一致する。

しかし問題は2000年から2003年の結果に明らかなように、減少率が1.8%と停滞していること、そして1990年代の急激な経済成長⁹⁾においても解消されなかった貧困層が存在することである。このことはチリ政府も、根強い貧困 (*Pobreza dura*) として認識しており、その対応策が先の“チリ国家連帯 (*Chile solidario*)”という3年計画の社会政策¹⁰⁾だった。

政策の概要を簡単に説明すると、全国において経済的数値から極貧層に分類される家族のうち「もっとも極貧状況にある家族」から順に選定¹¹⁾した22万5千家族に対して、開始から2年間は家族保護年金を支払う¹²⁾。受給家族には就業訓練プログラムへの参加などの「社会化」に従事する義務が伴い、社会化促進を見越してその年金を半年ごとに減額してゆく。その他、各種年金制度や一定額の飲料水手当てなど、「国民として享受すべき権利」に預かるための手続きを援助し、生活環境改善のために「身元」「健康」「教育」「家族」「住環境」「就労」「所得」の7項目についての適切なありかたとその訓練を受けることになる¹³⁾。

またもうひとつの問題は、プログラムに参加したのちに、それまで貧困層に分類されていた人びとの収入が一時的であれ、僅かでも貧困線を超えていれば、貧困層を脱したと数えられる点である。そうしたケースでは、貧困層に出戻る場合が多く、出戻らなかったとしても貧困線付近にあることには違いない¹⁴⁾。さらに、貧困率が減少しても所得格差は相変わらず大きく¹⁵⁾、失業率も減少してはいない¹⁶⁾。

チリ政府および政策決定を行う上層部をはじめ、「貧困」にかかわる外部において、貧困から脱するとはどういうことをいうのか。貧困克服計画の対象に選ばれることが何を意味するかという点から次に検証してみたい。

2.2. 上からの「下からの視点」——‘善意’の意図せざる暴力性

チリ国家連帯のプログラムにおいて「もっとも極貧状況にある家族」として選出される対象家族は、企画協力庁 (*MIDEPLAN*) の用いる家族カルテ¹⁷⁾がもとになっている。それは開発者側からみれば「住民視点から」あるいは「ボトムアップ」を象徴するものでもある。カルテには細かく様ざまな記入項目があり、居住者それぞれの年齢や家族構成、収入や仕事、家屋の素材や状態、ガス・水道・電気の状況、それからソーシャルワーカー（以下、SW）が訪問の時々聴取した住民の悩みの日記などの情報が盛り込まれている。その内容によって貧困度の点数がつけられ、下位から順に連帯プログラムの対象となる。しかし、それはたんに外から見た視点で作成したカルテを用いてボトムに暮らしている人を選んでいるにすぎず、住民視点をいかしたプログラムの構成、ボトムから出た意見を取り入れた政策づくりということではない。

具体例をあげるなら、チリには貧困者を対象としたいいくつかの補助金制度がある。しかし、そうした補助を得るにはいずれも数多くの手続きと申請書類が必要となる。総収

入やカルテの点数基準などの被受給資格をクリアした上で、申請の理由や獲得後の使い道などを盛り込んだプロポーザルが要求され、それは日本の科学研究費補助金や助成金申請と同様のタイプのものである。文字といえば自分のサインしか書けず、またそれで支障のない状況下に生きてきた人びとには、申請書を記述する技術はない。また、そうした申請機会が貧困者にとって即金獲得という実質的な価値がある一方で、獲得するには「われわれは貧困者なので困っております」という形で自らの状況を説明し、「給付されたら子供の教育のための環境を整えるのに利用します」と書く必要がある¹⁸⁾。これは、字を書けなくても暮らせる空間に、あるいはサインだけで支障のない生活のなかに、支配的な集団で当然とされる書類システムが、言いかえれば、外部文脈が侵入しているといえよう。給付金という魅力的なものを享受するためには、馴染まないシステムであっても従わざるを得ない。さらに自らの窮状を訴えるためには、外部でいわれている「貧困」という表象とイメージを用いて自分たちを表現することとなる。外部から名づけられた「貧困」と自らを認めていくことで、いわばサバルタンの状況はより強化され、それによって「悪しき貧困」は、公的な書類に記載された内部発言によっても裏づけを得た形となり、真実のように語られることになる。こうして、チリにおける貧困者はダブルスタンダード状況におかれる。「貧困」の外部が社会の中心的構造になっているがゆえに、無言化が重なり合う構造をつくりだしている。この悪循環は、次に示すように、幸せをはじめとするあらゆる価値の基準を外部からもたらそうとする。この外部文脈の侵入が、意図せざる暴力性をもつことは、‘善意’にもとづく介入であればなおさら見落とされがちであろう。

2.3. しあわせの外部性——「第一世界」の文脈の侵入

1981年の経済学者 A. センによるエンタイトルメントに関する議論以降の、様々な分野における貧困研究をごく簡単に要約すると、貧困者は能力を発揮する場を剥奪された状態にある。それゆえ、潜在能力^{ポテンシャル}を高め、Well-being にむかうための選択幅（＝参加機会や情報など）を増やすことが貧困克服のための方法である、ということになる。潜在能力とは、人が自ら価値を認める生き方をできるかどうか、個人の生活を真に豊かにするためにどんな行動をとるか、それを行なうための能力のことである。潜在能力と選択の幅は、それぞれの人間の、現実とのコミットメントの仕方によって形成された規範や、価値観によって決まるとされる。したがって、貧困の克服のためには、貧困者に「投資」をして彼らの潜在能力と選択幅を増やすことだという（セン 1999; 2000）。

この潜在能力アプローチが個人の行動に重きをおいた点は、合理性や統計数値を重視しがちな開発学や経済学はもちろん、人類学にも有用な概念かもしれないが、どのようにしたらその潜在能力を高めることが出来るのかを指示しない点では、曖昧な概念である。それは、現実とのコミットメントの部分の詳細や、コミットメントの仕方に関心が

あるわけではなく、結果として形成された「好ましくない」規範と価値観に目が向けられているために、その指示にも関心が向かないのであろう。

ここでとりあえずセンにしたがって、「貧困」をチリの事情に即して眺めるならば、次のことに留意する必要がある。①人間は Well-being を求めるものだという前提になっているが、そもそも生活する環境や個人によって人間の幸せはちがう。貧困の克服といったときに、貧困層からの脱却を幸せというのか、あるいは貧困の状況下で新しいテレビを買うなどの実質的で身近なよろこびをいうのか。安易に資本主義的視点からの幸せを述べてしまいがちなことへの留意。②選択幅を増やす機会を拡大する必要があるとしたら、どのような機会をどのように増やすのか、ともに考えるのが大事なのか、そのありうる方法とはいかなるものか。そして、③かれらの潜在能力はなぜ低いのか、どの点で誰の視点から低いとされるかを考えること。これらの点をチリでの具体例に照らして、以下で考えてみたい。

わたしがおもに調査したサンチャゴの G 地区¹⁸⁾ は市内でも指折りの極貧地域だけに、チリ政府をはじめ、NGO 団体や国連によって、いくつかの貧困克服プログラムが実施されてきた。G 地区には様ざまの様相をした家屋があるが、一般的に薄い材木で組み立てられて大枠をつくり、その間にダンボールを挟み込んだり、卵の入れ物の厚紙を重ねたりして壁を造り、必要な箇所を塞いでゆく。屋根にはトタン素材もみられるが、多くは発泡スチロールの上にビニールを重ねている場合が多い。床は踏み固めたとはいえ、土がむき出しのところが多いという状況である（写真 3、写真 4 参照）。

貧困克服プログラムでは、そうした家屋に必要な資材や机、椅子を寄付しようという具合に計画される。貧困からの脱却には教育が不可欠であり、勉強ができる環境としてまず机や椅子を、そして家族が揃って食事する場所を、という発想である。しかし実際にそれらを寄付したとしても、しばらくするうちになくなっていることがある。当面の生活費を都合するために売ってしまった場合もあれば、ドラッグを買う資金として換金することもある。そうした現実直面した投資家は、なぜ机を売ってはいけないのか説明しようとするとき、彼らにとって何がしあわせなことなのか、という疑問にぶつかる。毎日が同じように過ぎていく日常において、油で揚げたパンや豆を潰したスープが定番の生活に肉を添えることのほうが彼らの現在にとってよりしあわせなのだとしたら、どのように彼らに説明することができるだろうか。貧困克服計画では、目の前のしあわせをがまんして長期的な見通しを立てろというのが、子どもが学校に行ってそこで教育を受けたとして果たしていまの生活が変わるのか。その是非はともかく、投資者がもたらしたいと描くしあわせ——「第一世界」の文脈におけるしあわせの基準を投影してよいのかどうか。

個人が「潜在能力」をもつにいたる過程やそれを後押しする諸要因を考えずに、「潜在能力をいかに資本主義的にするか」だけを問題にするのでは、A. センの論理どおり

に貧困が克服されることは難しい。貧困者が、彼らの文脈において永遠に「机を売る」選択をし続ける可能性もありうる。だとしたら、何度投資を繰り返したとしても政府の目論む形では、貧困は克服されないだろう。あらためて、彼らの感じている現実はどういうものなのか、いかに現実とコミットしているのか、彼らにとっての自由やしあわせとは何なのか、彼らの生きる文脈を汲み取ることが必要であろう。その場合には、貧困といわれる暮らしの外部からの特権的な物言いも、本質化されている「貧困」像も、第一世界といわれるところの住人にとってのしあわせの要件や資本主義的価値観もいったん棚上げして考えてみなければならない。

世界レベルで開発にかかわる人間や政策立案者など、いわば「貧困」を外部から見つめる人びとは、自らがたどってきた道筋がほかの全ての国にとってもただ1つのコースなのだと思っており（小田 1997: 61-62）、道筋のはじめの方にいる彼らは悲惨で悲痛な面持ちの笑わぬ人びとだとイメージし¹⁹⁾、それを悪だと考え、その状況にあるかれら自身が「脱出」を望んでいると信じる傾向にある。貧困の暮らしは、世界に通用する大都市サンチャゴ内部の「底辺」という意味で「第四世界」として位置づけられもする。わかりやすく序列化した貧困のとらえかたでは見落としてしまう「第四世界的状況」²⁰⁾に暮らしているかもしれないのに。貧困者はそう単純に生きていてわけではないのだ。あたりまえに悩み、まじめだったり気まぐれだったり、適当だったりしながら彼らの文脈のうちに生きている。ダブルスタンダード化に応じて、各個人の属性に応じて、複数の文脈を生きているとも言える。ということは、複数文脈をもつ個人として曖昧さも持っているということなのだ。

センとともに貧困の定義が多様化、複数化されたとしても、なにをもって貧困と言うかの基準をつくるのは外部の人間であり、当事者たちの見解や生活実感や、複数の文脈に生きるさまは参照されにくい。それは、外部の人間の手によって基準がつくられ、「解決」策がつくられ、それに基づいて施策や援助が行われ、評価されるという閉じたシステムといえよう。

このシステムは、不衛生な環境や犯罪の多発と再犯、怠惰な生活や無教養などといった資本主義的スタンダード（資本主義的価値観にとっての世界が満たすべき要件）にあてはまらないような事柄を貧困者の負の属性として特徴づけ、一方でそれらを是正するべく連帯や統合、社会的排除からの解放という名の下に救い出そうとする。所得が絶対的に不足しているという場合の貧困は悪であるとしても、そこに生活する人びとが悪なわけではない。にもかかわらず、資本主義的ではないという理由から人びとの思考やハビトゥスを丸ごと問題化するのが、現行のシステムのやり方といえよう。

あるとき、高級地区で廃品回収をした帰りの親子が幹線道路で事故に遭い、9歳の息子が亡くなった（2003年8月12日 *La Tercera* 紙）。記事によれば、ダンボールを積んだ荷車を引いていた親子はバスの前におり、バスを追い越した車が息子に接触した。ここ

で記事が問題にしたのは、加害者の不注意や、荒いといわれるサンチャゴのドライバー問題ではなく「貧困者の子供の労働」であった。「こうした悲しい事件につながるような子供の労働は良くない、やはり貧困は撲滅すべきである」という趣旨のその記事は、世間一般にごくまっとうな記事として受けとめられる。だが、この出来事からまさか子供の労働を問題化されることなど、息子を亡くした父親は考えもしないであろう。こうした記事が「悲惨で悪しき貧困」をイメージづけ、逆にイメージが記事を書かせている。まずは「貧困」に「」がついていることに気づき、取りはざすこと。そこから思考をはじめることでは「貧困」の問題は開かれまいであろう。

3 「貧困空間」の人類学——浮遊ゾーンと沈殿ゾーン

「はじめに」でも述べたように、グローバルな都市に生きる貧困者にとって、都市内部での空間的移動はもはや不可欠であり、自然な営みである。先述のとおり彼らの営みには、客が好みそうなものを思案し、対応する力が発揮されている。世界の動向に敏感で、クライアントの好みを予測した反応は、柔軟かつ流動的である。この都市のあらゆるところに浮遊するようにあらわれている貧困について、これまでの人類学が馴染んできた「貧困の文化」という固定的で静態的な貧困イメージの払拭をねらいつつ、「貧困空間」として見ることを試論したい。

3.1. 貧困が沈殿する空間のハビトゥス

「チリ国家連帯」の支柱となっているプログラム実施のために、選定された「貧困」者たちを訪問する SW は次のように苦言をもらす。

「頭にくる。毎週家庭訪問をするけれど、冬はとくに11時だろうと昼だろうとベッドから起きもしないで、体を掻きながら「今日は何？」という調子。わたしは朝6時から用意して来ているのに。(彼らに)規則正しい生活なんて言っても仕方ないし、する必要もないと思う。プログラムが完全に間違っていて役に立ってないのは確かで、政治的に必要なだけ。」(2005年10月ロ・エスベホ区 SW 談)

われわれがそうであるように貧困地区での生活もまた多様であり、容易に集約できるものではないが、ここではまずかれらの生活サイクルについてとりあげてみたい。次に挙げる事例はいずれも G 地区の居住者であり、政府の経済指標によって貧困層・極貧層に分類され、廃品回収で生計をたてている人びとである(写真5, 写真6参照)。

2001 年 6 月 27 日曇り

① (E.D. 28 歳 約 \$48,000/月 家長で扶養家族 3 人)

今日は 9 時頃目が覚めた。冬場は寒くて、用を足しに行きたくなるから早起きになる。エクストラ (スーパー名) は開店直後に行ったほうがダンボールを集めやすい。でも今日は昨日の残りのポロト (豆スープ) を食べて出たから、着いたのは昼過ぎだった。大きいダンボールは 3 つしかなかった。でも帰りにワインのボトルを 5 本見つけたから良かった。今日はもう終わりだ。もう少ししたら子供を学校へ迎えにいて、広場でサッカーする約束だ。

② (J.S. 40 歳 約 \$40,000/月 家長で扶養家族 4 人)

11 時に目が覚めたが、寒いからベッドでテレビをみていた。ダンボールはこれから集めに行くかどうか迷っている。行こうとしたら友達がここでこうして話していたから、行きそびれている。でも蓄えがないから行くべきかな。

2001 年 7 月 3 日雨のち曇り

③ (E.F. 33 歳 約 \$52,000/月 家長で扶養家族 4 人)

今朝は 6 時に目が覚めた。でも 9 時までベッドにいた。寒いからセニョーラ (妻) とアンヘリータ (娘たち) と寝るんだ、寒くなくても一緒だけだね。自分が起きあがればみんなを起こしてしまうから我慢する。起きたからってやることもないし。雨だからダンボール集めにも良い日じゃない。でも 6 日は次女の誕生日だからボトル集めをするよ。ムニ (区役所) の向かいのモンセラート (スーパー名) のボトルリサイクルボックス知ってるか? 運がよければあそこひとつで終わりだ、今日は。

2001 年 7 月 4 日 15 時 小雨

④ (R.M. 38 歳 \$30,000/月 家長で扶養家族は母親 1 人)

今日は 10 時ころ起きたと思う。いつも見ているテレビ番組が途中だったから 10 時半かもしれない、わからない。妻がいなくなったから家に何も無い。時計も持って行ってしまった。(出て行ったのは) 夏の終わりだったから、3 ヶ月位前かな。自分は一輪台車しか持っていないから、たくさんのダンボールを集められない。今日はエクストラ (スーパー名) に 2 枚しかなかったから、集めるのをやめて、甥の三輪車を借りて先週集めた分を売ってきた。全部で 4,000 ペソと小銭になった。今夜は牛肉を食べることもできる。でもまずパンを買わなくちゃいけない。これからショッピングだ。

2001 年 7 月 5 日 曇りのち雨

⑤ (C.A. 52 歳 約 \$40,000/月 家長で扶養家族 3 人)

11 時に目が覚めたけれど腹痛で休んでいた。でも雨が漏るから屋根を塞ぐための

ビニールをさがしてきた。スーパーに行ったらダンボールはなかった。これから屋根を直すために友だちを呼びに行くとところだ。ダンボールは先週比較的集めたから今週はそこそこでも生きていける。

こうしたG地区の人の日常生活について、資本主義的規範の見地から述べてみると、①労働に限らず、食事や家事全般においても決まった時間に何かをするという毎日のルーティーンがないこと、②時間的拘束がないこと、③労働日と休息日の区別がないこと、④長期的見通しや計画を持たないか、計画する将来は数日以内程度の短期であること、⑤主要な行動範囲はスーパー・友人宅・区役所・ダンボール収集場といったいずれも徒歩圏内である、といった指摘になるだろう。学校教育を相対的に早く脱落してしまいがちな彼ら²¹⁾は、資本主義社会に見合った規律訓練をうけておらず、定職を持って働く縁者や近隣者を持つことも少ない。こうした、時間に拘束されることのない毎日の繰り返しから形成されるのが、「貧困のハビトゥス」のひとつとしての「時間のハビトゥス」といえる²²⁾。廃品を集めれば最低限の食料は確保できるため、定職を必死で求めることもなく、差し迫って必要がないときは仕事よりも他のことを優先させ、明日への余剰を蓄積するような実践にもとりたてて関心を払わない。こうした蓄積の不在は、貧困下の時間のハビトゥスによって産み出されるわけだが、しだいに食料獲得の相対的な容易さとも相まって、それに見合った貧困時間のハビトゥスを形作る要因となり、ここに循環がうまれる。

出来事にしがたった時間のハビトゥスに慣れた身体にとって、資本主義的な時計時間にもとづく生活構築は、にわかになじむものではない。先述の資本主義的見地からG地区の日常的特徴を述べたくだりを改めて見ると、①から④のいずれもが否定的であり、欠損と捉えられるものである。たしかにG地区では、SWのもってくる就労訓練プログラムを試しても時間が守れなくて脱落する人が多い。また刑務所帰りの住人は口をそろえて「大統領のような分刻みの生活がつかった」という。実際にそんなに忙しいことはない壁の中の生活であっても、感覚の違いを認識するのに十分な「システム」との接点がある。時間感覚に差異はあっても、優劣はない。それにもかかわらず、こうした拘束性のゆるいテンポを形成している貧困地区は矯正されることが必要とされ、システムに適応できないと怠惰とか自堕落というレッテルを貼られる。

貧困のハビトゥスを身体化させる環境であり、そうした身体によって形作られたものでもある貧困地区とは、貧困濃度が濃く、沈殿しているかのうようである。しかし逐次その要素は更新されながら滞留している。したがって、環境に適応した身体的・感覚的要素を強固にする循環があるために閉じているように見えるが、実際には決して閉じることのない貧困空間の母船のような場所である。都市に浮遊している貧困を、この母船から伸びたアメーバの偽足のようなものとしてイメージしてほしい。貧困者は親しんで

いる環境や感覚を身にまといながら都市の中を移動し、グローバル化に対応するなど必要に応じてその形を変え、グローバルな要素をその体内に摂りこみながら母船へと戻って融合する。摂りこまれた要素は母船のローカルな条件に応じて取捨選択される。「貧困空間」とは、貧困地区という物理的な場所そのものを中心的基盤としながらも貧困者の身体性や流動性に伴って、ときにアメーバ単体として、あるいは集合体として都市を覆っているのである（写真7参照）。

3.2. ストリートで育まれる身体

「貧困空間」の母船における生活の中心は路地（*pasaje*）すなわちストリートである。そこにはゴミが散らばり、交通事故に遭った縁者を祀るアニミータ（*animita* 小さい祠）があり、犬やネコや野良ヤギがおり、住む人が素足で過ごし、夏には子供たちが水浴びをし、クーデター記念日には若者たちが悪乗りして騒ぎを起こす。ときに友人同士や家族のけんかが起こり、日々の退屈しのぎや、口うるさい妻や彼女から逃れた男たちが屯するところでもある。ストリートで展開される話の多くは、知人友人の噂話や、草サッカーやプロサッカーチームについて、あるいは恋愛などの日常的な世間話だ。わたしが付き合っていた屯する人びとは、どういうわけか同じような意見と態度をとりがちで、たとえば「このあいだ来た日本人の女の子はかわいいと思う？」と問いかけると、「かわいい」とひとりがいえば「そうだ、そうだ」といいながら、批判的意見や対立を示して議論を交わすよりも同調し、その共有感覚に満足して酒を注ぎあって盛り上がる。情報伝達の意図や話の内容については二の次で、その場に居ることと会話に参加していることという関係形成・関係確認に役立っているこれらの会話は、意味や価値の共有による連帯とともに、空間的で身体的な連帯をも育んでいるといえる。ストリートとは、そうした連帯や社会関係を基盤とした「常識」が共有され、個々の価値観が形成される場であり、また、アメーバになって摂り込んできた素材が吟味され、ローカルなものとして根づく場でもある。言い換えるなら、ストリートとは貧困者にとってもっとも身近な共同性の場であり、準拠枠といえよう。ストリートに面した家屋には玄関や扉という空間的な境界がないわけではないが、実質上は鍵の存在しない各家屋に親戚・隣近所の人びとはあいさつなしで自由に入出入りできる。そのことがストリートをプライバシーが曖昧に開かれた環境にしており、そこに生まれ育ち、暮らす人びとは、それに応じた個のありかたと人と人との関係性を身体化しているのである。こうした個のあり方は、個室を与えられて育ち、家族内においてもプライバシーが尊重されるような環境におけるものとはかなり異なったものになると推測できる。なかでも、個人間の境界や連帯のあり方の差は大きいであろう。そこで、このような社会関係の核としての個人について、貧困者の個人の身体配慮について取り上げたい。

まずいえるのは、G地区における肥満率は5割を超える²³⁾という数字の通り、太った

人が多いこと、さらには、歯がない、視力が弱い、素足率が高い、爪が硬い、口笛がとれる、などである。こうした身体で暮らす背景を考察するために、爪への配慮を例にとってみよう。彼らは爪を切らずに削る。栄養の偏りに起因するのか、多くの成人の爪には筋や溝がいくつもできており、手の洗浄頻度が低いことで溝に汚れが入り込む。爪の周囲の皮は厚くタコになり、爪は硬いうえに皮に食い込んでいるので通常の爪きりでは歯がたたない。したがって彼らは爪が伸びるとヤスリのようなもので削る。それを重ねていくうちに爪の断面はつぶされて徐々に厚くなる。すると肥厚した爪の下にまた汚れがたまることになり、そのようにして日常的に黒く硬く分厚い爪ができあがる。これは爪切りがない生活だからそうなるのでも、配慮を怠っているわけでもない。爪切りでメンテナンスする暮らしと比べて配慮の仕方が違うのである。

もうひとつの端的な例として、歯がない人が多く見受けられることがある。それを欠損ととらえる NGO や政府貧困克服計画では、差し歯を限定数提供したことがあり、G 地区にも、EU の行った“極貧克服プロジェクト 2002”の一環で差し歯をすることになった人びとがいた。該当者には診療ののち、必要最低限の数だけ差し歯が施された。それから間もなくして、差し歯になったある男性は、歯に詰まった食べかすを気にして指で除去を試みたあと、手近にあった釘を楊枝がわりにし、口内を傷つけた。そして傷口から雑菌が入り込んで膿んでしまい、結局 4 針縫うこととなった。そのとき、歯科医や SW などの開発側の人間は、その男性が不衛生な手で口内をいじったこと、日ごろから手が汚いこと、釘を楊枝にしたことなどの落ち度を指摘した。

ここでの問題は、開発者がこの一連の出来事の原因を男性の落ち度とした点であり、また、歯がない人には歯を与えるのが当然だとする思考である。もちろん歯をほしがる貧困者も多くいるが、歯はあってしかるべきものという「あるべき姿」を描くことは、同時に、貧困者が今後われわれに近づくべく「歩むべき姿」=脱貧困イメージを描いていることにはかならない。人の暮らしとは、その人が身を置く環境を体現し、その身体性がまた環境と生活空間を形成しているのに、仮にそうだとわかっているのに、貧困者の暮らしとそこに形成されている空間や環境は「排除対象」ゆえに無視されている。

3.3. 「ある世界」と「あるべき世界」——人はどこから来て、どこへ行くのか

この貧困克服プロジェクトにもその一端が見られる「貧困」の問題とは、人間=身体の見方、世界の見方にかかわる問題である。開発者や貧困の母船地区外部の人間にとって、貧困者とは接触可能かつ同時代に生き、そこにいる存在である。キリスト教的にいうなら兄弟であり、国家的にみれば同じ国民である。であればこそ「連帯」しなければならないと考え、彼らを救うことは自らの使命だとする人もいる。そのことが、貧困者=自分たちに近づけるべき人びと、として自明化しているのが現状なのだ。

「貧困空間」が世界を覆っているように、現代世界のとくに都市においては、きれい

に切り分けられるような固有のものは存在しない。イデオロギーとしての「あるべき世界」というのはどの世界にもあり、いっぽうでイデオロギーにそぐいきれない現実の「ある世界」が存在する。関根はこの「ある世界」にこそ現実性と個別性へむかうベクトルがあるのだといい、そして、研究者自身がそこから思考することが個別性を持った1人の存在としての人類学的実践の語りともなるという（関根 2001: 323）。本稿における「貧困空間」という視点の試みは、貧困の母船地区の「ある世界」に降り立ったわたしの、貧困という暮らしの現実とそれが覆っている空間をよく見る方法の模索である。そして、それと同等の重みで、われわれ自身とわれわれの「ある世界」を問い直す実践でもある。なぜなら、「貧困」問題で厄介なのは、開発者や貧困母船地区以外の人間が貧困者の未来に描く「あるべき世界」が、自分たちがすでに実現したという意味では「ある世界」だからである。優劣や支配・被支配関係がかかわる場合の「ある世界」と「あるべき世界」はすでに分かちがたく交錯しているのであり、その世界の切り取りかたや他者の捉えかたには、われわれが自らを問わないでいられる認識論のゆがみが見て取れるのである。貧困母船地区にアメーバが取り込んだものが根づいているとき、実際はそれ相応のローカル性を帯びて存在しているのだが、われわれの「ある世界」のものと似通っているために、「われわれの現在」と「貧困者の近未来」は当然のように重ねあわせられ、無前提に「同じ世界を生きている」という認識となっているのである。

大事なのは、貧困母船地区はどのような歴史の深度をもって形成され、そこで多くの時間を過ごす人びとはいかなる身体性を育んできたのか、これから描く未来はどういうものであるのかを考えることであり、それは貧困の母船地区の文脈で考えてゆくことでしか可能にならない。「ある世界」からはじめること、あるいは真に「下から見ると」いうことは、言いかえれば、そこで育まれた歴史と身体を、あるいはそこからこ育んだ歴史と身体を、実感とともに踏まえることであろう。そして、この実感や生きた人間らしさを含めた現実の「ある世界」からはじめることとは、結論であると同時に始点でもあり、なによりもプロセスだということを強調しておきたい。

4 ストリートに交錯する「環境世界」

貧困者と、そうでない人間とが区別されるとしたら、それは育まれた身体の違いであり、そうした身体で世界とかかわる、かかわりかたの違いである。歯の具体例に照らし言うなら、資本主義社会になじんだ身体性をもつ開発者側の人間からすると、貧困者は「歯がない身体でそこにいる」と見える。そして、歯がないことの弊害——顎の退化、咀嚼頻度の減少による脳刺激の減少＝思考能力の低下など——を防ぐという専門の見地から、貧困の現実と乖離した提案をしてしまう。食後の歯磨き徹底の勧めが良い例だ。サンチャゴで歯ブラシを買おうと思うと、国内メーカーの安価なものでも平均1,000ペ

ソ〜1,200 ペソくらい（200 円〜250 円）する。これを家族の人数分用意して、しばらくもつとはいえ、消耗品として生活に導入するには高価だ。専門家の世界においてそれが正しいことだとしても、かれらは「歯がない身体で世界とかかわって生きている」のであり、彼らなりに「行こうとしているどこか」があるのである。それを考慮せず、差し歯のメンテナンスが貧困者の生活世界において俄かに馴染むものではないことを想定しないならば、それは暴力的な実践というほかない。人として暮らす背景への配慮なく発動される専門的实践は時として傲慢であり、自己の前提に無自覚な強者が、より事態を悪化させているという現実はいき直す必要があるだろう。貧困者たちがこれまで蓄積してきた身体性と世界とのかかわりかたはどういうもので、描かれるだろう未来はいかなるものでどこへ行くのか、そのことを踏まえることが「下から見る」ことのひとつの方法といえよう。

ある日、わたしがG地区の友人Kと区役所の待合室で並んで座っていたとき、むかいにトマトの缶ジュースを飲む中産階級の女性がいた。Kはその缶を廃品回収の対象として、つまり収入としてみたが、わたしはこの国にもヘルシーな飲み物があったのかという感動とともに、情報源としてその缶に注目した。「下から見る」というのは、「貧困という底辺」から見るということではない。その人の育んだ身体と空間とのかかわりかたを軸とした生活実感から立ち上がるということであり、支配・被支配や、貧困かそうでないか、という区別とは無縁の思考法である。

この、あるモノの価値や意味が人によって異なること、この当たり前のことが、とくに貧困者相手には見落とされがちである。見落とすならまだしも「後進的で、貧しさの由来になるような排除すべき価値観」であると、見落としてよいものとして片づけられもする。貧困者が価値を置くものが何であるのか、それが取るに足らないものかどうかを決めるのは、彼ら自身である。価値観とは、その人が暮らしを営む世界全体との相互関係によって身体化されており、必要な取捨選択や修正や改訂が絶えず行われている。だがその修正は必ずしもグローバルに対応したものだけではなく、個人の事情でそれぞれの文脈によってなされているものである。トマトジュース缶のエピソードからわかるのは、Kとわたしは触れあえる近さの、あたかも同じ空間にいながらにして、それぞれの過去の経験や諸般の事情＝文脈に応じた別の世界をまわっているということである。ここで、こうしたそれぞれの世界について述べた「環境世界」の議論を参照しておきたい。

「環境世界」とは生物学的な種ごとに異なる世界認識であり、環境から主観的に作り上げる世界のことである。これを提唱したユクスキュルは、ダニの例を挙げる。ダニの環境世界は酪酸だけに反応する嗅覚と、獲物の皮膚にかんする触覚と温覚という3つの感覚だけを頼りに構成されている。ダニは植物の枝先で動物が下を通るのを何年も待ち続ける。動物が下を通ると、温覚によってそれを察知し、酪酸に反応して飛び降りる。

そして触覚によって、動物の体毛のない皮膚をさぐりあて、穴を開けて潜りこんで血を吸う。血を十分に吸い終わるとダニは地面に落ちて卵を産んだ後、死ぬ。認知対象としての酪酸と、行動対象としての酪酸との相互限定だけがダニの内界を形作り、環境世界とのあいだに円環関係が成立する。これがヤーコプ・フォン・ユクスキュルの機能円環説の眼目である（ユクスキュル 1970）²⁴⁾。さらに、ヤーコプの息子であるトゥーレ・フォン・ユクスキュルはこの機能円環説について、人間にとっての環境世界である「状況」に適応できるよう拡張した（T.ユクスキュル 1979）²⁵⁾。トゥーレによれば、人間もまたダニと同じように環境全体からある部分を切り取って内界を形作る。ただそのときに、ダニが生物学的で本能的な欲求から形作っているのとは違い、「自由な想像（freie Phantasie）」によって形作るという。つまり、貧困者がトマトジュース缶を認知することで、「あのしっかりした缶は高く売れる」という過去の経験から状況を瞬時に構想し、未来と行動を形づくる。個体の内面と周囲の世界とは分離不能な全体を形づくっており、それにもとづいて行動されるということだ。その自由な想像を可能にするオブションは、身体と環境とのかかわりから選択肢として身体化（embodiment）されているものである。

ストリートには、環境世界が交錯しあっている。サラダばかりを食べる上流階級の女性と清掃員はおなじ空間にしながら、ことなる環境世界をもち、かといってまったく接触がないわけではない。清掃を終えてスラムの家に帰ってきた友人のMは、サラダブームは持ち帰らなかったが、サラダを貪り食う女性が前髪を貼り付けるようにしてピンで留めていた流行は見逃さなかった。（写真8参照）

われわれの未来が過去、現在と切り離せないように、貧困母船地区で多くの時間を過ごす貧困者もまた同じように切り離せない過去、現在、未来という時間の流れのなかに生きている。そして、相応の価値観を形づくっている。価値観は、感覚のすべてに浸透しており、時折それが無意識に表出することで、その影響の深さを再認識させるものでもある。

たとえば、ある日のテレビのニュース放送でスラムに住む青年がインタビューに応じていたのを聞いたときのことだ。その青年はドラッグの仲介をしており、「でもどうせおれたちは使い捨て（desechable）なんだ」といった。人間の使い捨て、というのは、資本主義的競争社会の原理のようであり、近代的な人のありかたというイメージのいっぽうで、感情のない哀しみとか否定的な意味が感じられる。ブラウン管の中の青年もその意味合いをこめていなかったわけではない。しかし、一緒に見ていたスラムの友人は、「使い捨てって便利だろ？ 短期間で役に立つ。それにリサイクルできるものがほとんどだ。使い捨ては1回とは限らないんだ。最高だってことだ。」と解説してくれた。「どうせ」ということばを枕詞にするのは、彼らは「外の世界」の住人がどう反応するかを知っていて、自然にそう言語化することを身体化している。そして、インタビュー回答への

サービストークにはお構いなしに、捨てられたら終わり、という考えではない「自由な想像」による未来の描きかたをしているのである。

いっぽう、外の世界で育まれた身体が披露する感覚はどんなものであろうか。貧困濃度の濃い空間において家屋に充満するにおいを感じたとき、どう記述するかで考えてみよう。におう空間を、「くさい」と記述することによって呼び起こされるのは、それを言語化するにあたって出てくる価値の指向性である。つまり、感覚自体が価値指向性をもっており、これがソーダスいうところの「身体化 (embodiment)」であろう (Csordas 1994)。彼は「身体は歴史を持っており、文化現象である」とする立場から、身体を分析の中心にすることで、文化・自己・経験についての理論を再定式化する方法論的機会を得られると考えている。「くさい」と書いてしまうわれわれの身体はどういうふうに着育されてきたのか？ 環境に着育される身体というのは、たんに、血流や細胞や皮膚という物質としての存在だけではない、「現象としての身体」である。このことは、くさいと感じるのが悪いというのではなく、「におう」ことを「くさい」と疑いなく記述する自分の感覚には価値指向性が含まれていることに留意すべきだと教えている。いっぽうで、対貧困者への対応が一面的・一方的になり、憐憫や強制や暴力的なかわり方が蔓延するなかで発言する貧困者の身体は、世界のありかた＝文化現象を照らし出しており、彼の身体自体が文化現象なのである。

貧困者の感覚することや身体に現象する価値観について、そして、資本主義的身体に感覚されて現象する価値指向性とを簡単に見た上でいえることは、「身体は精神や周囲の世界から切り離されてある一個のものではない」ということだ。身体とは、「世界と精神とを結びつけてひとつの体系を構成する諸関係の束のようなものだ」ということでもある。このような世界と身体の関係性を的確に述べるのは、メルロ＝ポンティであろう。彼の「世界はほかならぬ身体という生地で仕立てられている」(メルロ＝ポンティ 1966: 279)ということばは興味深い。メルロ＝ポンティの身体論においては、身体と世界がたがいに包み込みあい、飲み込みあう関係性にあることが述べてられており、その相互依存の関係によってこそ人間が存在することが可能になるとする。ストリートで育まれた身体という生地によって、彼らが織り成す世界——形作る環境世界もまた、貧困者が存在するのに必要な時空である。それを能天気な善意や揺るぎない進歩史観的前提によって気づかないこと、軽視したり無視することは、貧困者が人間として存在することを認めていないのと同じかもしれない。資本主義的身体が考える、「世界が満たしているべき要件」は、絶対ではない。

5 おわりに

概念やパラダイムは流動する世界を相手にするだけに、すぐに現状に見合わなくなっ

てしまうし、いつのまにか本質化してしまう。研究者や専門家はその自覚が不可欠であると同時に、書き換えるにあたっては、概念をとおして見極めようとする相手に見合った視点を模索して、そこから概念を再考する必要がある。それだけではなく、概念を支える知識集団側も同等に解剖の俎上にのせなければならない。他者をとらえるとき、どのような身体として現象し、世界との往還関係をもっているのかを考えること——そのひとつの方法が「ストリートの人類学」なのだろう。ストリートの人類学とはそのままでの意味で、路上の出来事の人類学として、「貧困空間」のような都市に浮遊して沈殿する貧困のありさまを民族誌的に描くことだ。いっぽうでより抽象的にストリートにあらわれる交錯する空間をとらえる視点でもある。

都市に浮遊する貧困と、貧困の母船地区からアメーバの偽足のように都市を移動する貧困者と、そのいずれもひっくるめたものが貧困空間である。「われわれ」も開発者も貧困の母船地区に住まない人間もすべて貧困空間に覆われていると考えることで見えてくるのは、つながったかにみえる空間のまとまりのなかには、多様性とそれに応じた身体性があり、価値観があり、時間の流れがあり、世界があり、それらは一律のものとして捉えられないということである。専門家や研究者も、そこに何某かの母船を形作るアメーバなのであり、自分たちの身体性を問わないままではいられない。

人類学は、生活世界つまり「人がそこで生まれ、他人とさまざまな関係を結び、〈顔〉のみえる関係とその連鎖からなる場を生き、死んでく世界」(小田 1999)においてローカルを研究することでこれらのことに気づけるはずなのに、いつからか強者集団、学問集団の一員でいることに慣れてしまった。顔が見えるだけに、また、同じ空間に生きて接触や会話が可能なだけに、見落としてきたことを自覚するべきであろう。たとえそれが世界を席卷する偉大になった概念であれ、貧困という、解決しがたいといわれて久しい対象が相手であれ、問い続けることにもまた意味がある。われわれの世界では、「われわれ」を問わずに発する問いがあまりにも多い。まず問わねばならないのは、われわれ自身である。

謝 辞

本稿のもとになる調査は、科学研究費補助金基盤研究(A)海外学術「トランスナショナルリズムと〈ストリート〉現象の人類学的研究」(研究代表:関根康正・2006年度～2009年度)および、日本学術振興会特別研究員奨励費「貧困空間の人類学:〈下からの民族誌記述〉と知のリハビリテーションへ向けて」(研究代表:内藤順子・2007年度～2009年度)により実施可能となりました。

また、貧困研究をすすめるなかで暗中模索の状態にあったわたしは、国立民族学博物館共同研究「ストリートの人類学」(2004年度～2007年度)に参加させていただくことで様々な刺激を受け、いろいろと着想し、学ぶことができました。研究会のメンバー

の皆様へ御礼申し上げます。そして、この機会をくださった代表の関根康正先生には、とりわけ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

注

- 1) ここでいう貧困者とはチリ政府の定める経済的指標により区分される階層および、低所得者居住区に住まう人びとのことである。2003年におけるサンチャゴ市貧困は24.8% (MIDEPLAN チリ企画協力省 2003年・INE チリ国家統計局資料 2003年) であり、首都人口の約4分の1にあたる人びとが該当するといえる。
- 2) 極貧層とは政府の定める経済階層区分であり、首都圏在住で世帯あたり21,856ペソ以下の収入／月の場合をいい、貧困層はその2倍額43,712ペソ／月以下の世帯収入をいう。ポブラシオン (Población) とはスペイン語で人口、集落、居住地区を意味するが、とくにチリでは行政区 (Comuna) のなかの地区 (Sector) の下位区分としてポブラシオンを用いる。多くの場合、いわゆるスラム的居住区と同義で使用される。
- 3) 本稿において「貧困」と記した場合には、こうした指標とは別に、スラムにおける“劣悪な”居住環境、犯罪率の高さ、怠惰な生活様式といったイメージによって悪のレッテルを貼り付けられて語られる貧困を意味する。
- 4) Informe del Consejo Nacional para la Superación de la Pobreza: Presentación
- 5) 貧困に関する研究では社会学、政治学、経済学のほかキリスト教団体による報告書があげられる。社会学では大学調査実習で貧困地区が対象とされる以外には、貧困層の言語や生活様式などの文化的側面についての民族誌的なものがある。しかしあくまでフィールドとしての貧困であり、概念の検討や開発における問題を扱うものは見受けられず、実際の「貧困」撲滅運動や克服計画に社会学者がかかわることはあるが、調査メソッドの専門家としての参加にすぎない。政治学では南米諸国間との比較からチリの採るべき貧困政策への提言や、現在施行中のプログラム評価が数多くなされ、また経済学では数値的な貧困の変遷や、数値からみた政策分析と見通しについての研究が大半を占める。人類学的に興味深いのはキリスト教団体をはじめとする支援活動団体の報告書である。「貧困」の実態を知らしめる濃厚な民族誌であり、国家の政策が最貧層の視点と見合っておらず、期待と要求に役立っていないことをとりあげ、参加型協力の視点を強く主張している (VILLATOROS 2004: 13-14)。しかし団体の活動の宣伝の風味も強いので、「貧困」概念に沿ってその劣悪さを増長して描く傾向もある。チリでは国家主導および各種団体の貧困撲滅政策を取り巻いて、それに連動するような研究が主体となっている。
- 6) 貧困を悪とする理由を考えることは、いくつかの問題系を含む。たとえば、キリスト教諸国においては思想的にハーモニーよりもユニティを重視するのではないかという議論がありうる (『臨床とことば』 鷲田清一・河合隼雄 2003)。そのことは、自国内にいる異質な存在への目配りや介入あるいは統合というかたちで、ハーモニーに寛容な日本人的視点からはとらえきれない文脈がある。また、政府が貧困問題として扱っている部分には、先住民問題を貧困に被せている可能性など、覆い隠されている別の問題が見え隠れする。スケープゴートとしてのありかたもまた解剖していく必要があるだろう。
- 7) MIDEPLAN では1997年頃から貧困地域を含む低開発地域に関して「内なる辺境 (Frontera Interiores)」ということばで表現することがある。これは1994年に陸軍が地政学的な低開発地域の情報を提供したときの用語である。チリ軍部は低開発を安全保障の問題と関連付けて

おり、軍事政権終了後の立場の保持のためにもそうした情報をかなり協力的に政府に提供している。

- 8) CASEN: La Encuesta de Caracterización Socioeconómica。2003年11月8日から12月20日までの間に無作為にイースター島を除く全国68,400世帯、合計約270,000人を対象に実施され回収している (Serie CASEN 2003)。
- 9) 1989年から1997年の間に実質賃金が約27%上昇し、全国失業率も一時5.7%まで下がった。
- 10) この政策は2005年に終了し、評価期間1年を含めた2006年の結果を出す予定だったが、概ね良好という程度の見解しかなく、良好ゆえにプログラムは存続している。少なくとも政策開始後2年時点での貧困層の減少率は1.8%にとどまっており、過去5年の値とほぼ変化がない。しかし政府は減少の割合よりも人口に注目し、「2000年には約849,000人いた極貧層が2003年には約728,100人となり、約121,100人もが極貧層を脱出したのはこの国家連帯政策の成果である」と自己評価している (CASEN 2003: 3)。
- 11) 全国共通の貧困層居住環境診断カルテの点数から割り出す (FichaCAS, FichaFamilia)
- 12) はじめの6ヶ月は1家族あたり10,500ペソ、次の半年は8,000ペソ、次に5,500ペソ、そして2年目終了までの半年は3,500ペソである。
- 13) チリ国家連帯計画実施の支柱としてブリッジ・プログラム (*El Programa Puente*) を置き、選定された対象家族へ介入する。主に地区のSWが携わり、プログラム規定どおり週1度の監視チェックをする。各項目の内容は、家族のあり方について「家族間で日常的に、習慣や生活時間のことやレクリエーションのスペースについてなど話し合いなさい」とか、身元について「全家族がIDカードを持ちなさい」「漏れなく自治区の貧困者カルテに記入されなさい」といった細かい指示がある。これらを政府は「社会化」またはUNDPに則って「人間開発」と表現している。
- 14) 「貧困線が43,712ペソで、昨年40,000の収入しかなかった人が今年45,000になったから貧困を脱したという。それで一体なにが変わるのか」 (La Tercera 2004.8.19 投書)
- 15) 2003年の所得分配は、一世帯あたりの現金収入比較では最低所得層は全所得の1.2%、最高所得層が41.2%を占める。金額にして前者平均が63,866ペソ (約120USドル)、後者が2,174,676ペソ (約4,030USドル) である。一人当たりの月平均収入では前者が13,582ペソ (約25USドル)、後者が819,973ペソ (約1,520USドル) である。 (CASEN 2003: 3)
- 16) 2003年の全国失業率は5.8%だが、貧困層の失業率は20%を超えている (INE)
- 17) Ficha CAS と呼ばれる家族カルテで、主として地区のSWが訪問して作成する。
- 18) サンチャゴ市東部に位置するベニャロレン区にある低所得者居住地区である。
- 19) 2003年に、大学の社会学調査実習で低所得者居住区に入った学生24名のうち20名もが、「貧困者なのに笑っていた」という驚きのコメントを残した、驚くべき感想の束がある。
- 20) 「第四世界的状況」とは、「第四世界」として「第一世界」から名づけられるまものとく「資本主義の底辺」に渦巻き、そのように見えるいっぽうで、ひとつの決めつけでは理解されるべくもない人の暮らしの日常をとらえていく観点であり、人が複数の文脈を生きる状況そのものとして考えている。
- 21) G地区の家長の教育歴：無教育11%、初等教育経験46.1%、初等教育修了17.7%、中等教育経験16.1%、中等教育修了9.1%、高等教育経験・修了0%、識字率：51.62%
- 22) 貧困のハビトゥスとして、出来事中心に生活サイクルが構成されることを「出来事時間のハビトゥス」と呼ぶ (内藤 2004)。
- 23) 肥満はチリ全体の社会問題として認識されており、2006年1月にはチリ厚生省から「肥満対策レポート (*Estrategia Global contra La Obesidad*, MINSAL)」が出された。本書類では、学歴

= 社会階層レベルと肥満率の比例を明記している。

- 24) ジル・ドゥルーズはこのユクスキュルのダニのエピソードを好んで引用する。彼は著作のさまざまな箇所で見出しに出しており、限定的なダニの知覚のあり方を人間との対比で高く評価する。人間が全的（メジャー）な知覚を持っているという幻想から、マイナーへ引き下がることが大事であり、それによって見えるようになるものがあると。たとえばドキュメンタリー映画『ジル・ドゥルーズのアベセデール（L'abecedaire）』（ビエール＝アンドレ＝ブタン監督、仏語、1988年）のA（Animal）の項目などで詳しく述べている。「マイナーへ引き下がること」というのが、本稿における〈「貧困」者〉というイメージと、「ダニ」や「マイナー」という言葉と重なることで劣位や周辺的な存在と同一化しているのではないかと誤解される懸念があるが、そうではなく、人間も理屈とか論理の前に動物であるのだから、限定的な知覚によって生きていることを自覚しつつ「ある世界」からはじめよう、という主張に通じる思考であるとわたしは考えている。それは「環境に育まれる身体」という見方と、それぞれの環境世界が交錯するストリートのとらえかたにヒントを与えてくれたものである。
- 25) ドイツ語の訳出にあたりドイツ系チリ人 Salvador ENRIQUEZ 氏に協力いただいた。

文 献

- Cambi, R. (ed.)
2003 *Chile sin Pobreza: Un Sueño Posible*. Libertad Desarrollo.
- Csordas, T. J. (ed.)
1994 *Embodiment and experience*. Cambridge Univ. Press.
- エドウィン, E.
1987 『男が文化で、女が自然か? ——性差の文化人類学』山崎カヲル訳、晶文社。
- Gambi, M.
2005 *Pobreza, Crecimiento Económico y Políticas Sociales*. Editorial Universitaria.
- 初鹿野直美
2005 「貧困の国際政治学——「貧困削減」の背後の政治力学」『ワールド・トレンド』6月号 117: 24-27。
- イグナティエフ, M.
1999 『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』添谷育志・金田耕一訳、風行社。
- ケインズ, J. M.
1995 『雇用・利子および貨幣の一般理論』塩野谷祐一訳、東洋経済新報社。
- 前川啓治
1996 「開発援助と人類学の指向性——方法援助の視点から」『族』27: 9-18。
- メルロ＝ポンティ, M.
1966 『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房。
- Ministerio de Planificación y Cooperación (MIDEPLAN)
1996 *Balance de seis años de las políticas sociales 1990-1996*.
2001 *Pobreza e Indigencia e Impacto del gasto Social en la Calidad de Vida*.
2002 *Síntesis de los principales enfoques, métodos y estrategias para la superación de la pobreza*. División Social Departamento de Evaluación Social.
2004a *Conceptos Fundamentales Sistema de Protección Social Chile Solidario*.

- 2004b Serie CASEN2003: Volumen1. “Pobreza, Distribución del Ingreso e Impacto Distributivo del gasto Social”.
- Municipalidad de Peñalolén
- 1999 *Diagnóstico Comunal de Peñalolén 1999*.
- 2001 *Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2001*.
- 2003 *Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2003*.
- 内藤順子
- 2004 「貧困をひらく——チリ・サンチャゴ市のスラム住民の暮らしと貧困克服計画をめぐって」『九州人類学会報』31: 56-62。
- 小田 亮
- 1997 「発展段階という物語——グローバル化の隠蔽とオリエンタリズム」川田順造編『反開発の思想』（岩波講座文化人類学3）pp. 61-78, 岩波書店。
- ロサルド, R.
- 1998 『文化と真実——社会分析の再構築』椎名美智訳, 日本エディタースクール出版部。
- 関根康正
- 2001 「他者を自分のように語れないか?——異文化理解から他者了解へ」杉島敬志編『人類学的実践の再構築』pp. 322-354, 世界思想社。
- セン, A.
- 1999 『不平等の再検討——潜在能力と自由』池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳, 岩波書店。
- 2000 『自由と経済開発』石塚雅彦訳, 日本経済新聞社。
- 2002 『貧困の克服——アジア発展の鍵はなにか』大石りら訳, 集英社新書。
- Seta, M. L.
- 1996 The Anthropology of Cities: Imagining and Theorizing the City. *Annual Review of Anthropology* 1996 (25): 383-409.
- 1994 Embodies metaphors: Nerves as lived experience. In T. J. Csordas (ed.) *Embodiment and experience*, pp. 139-162. Cambridge Univ. Press.
- 菅原鈴香
- 2000 「貧困概念をめぐる一考察——開発学と人類学からの貢献とヴェトナムの貧困問題調査の現状と限界」『国際協力研究』16 (1): 69-79。
- ユクスキユル, J.
- 2005 『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳, 岩波文庫。
- von Uexkull, T.
- 1979 *Lehbuch der psychosomayischen Medizin*. Munchen: Urban & Schwarzenberg.
- VILLATOROS, Pablo y FERNÁNDEZ de Hogar de Cristo
- 2004a *Radiografía de la Pobreza: Una Consulta Participativa a los Usuarios*.
- 2004b *Los Pobres y la Televisión: Una Consulta Participativa*.

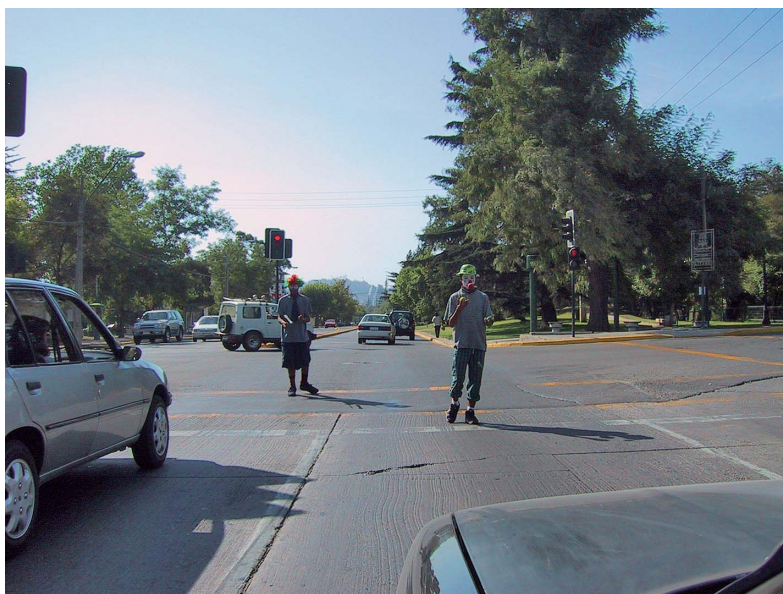


写真1 上流地区の路上パフォーマンスをする青年たち



写真2 サンチャゴ市随一の美食ストリートで日除けを置く車守



写真3 たまごのパッケージを重ねてつくった壁



写真4 土がむきだしのリビング



写真5 ダンボール回収の様子



写真6 リサイクル用のボトル回収所



写真7 上流地区オフィス・観光地区で廃品回収を終えた親子連れ

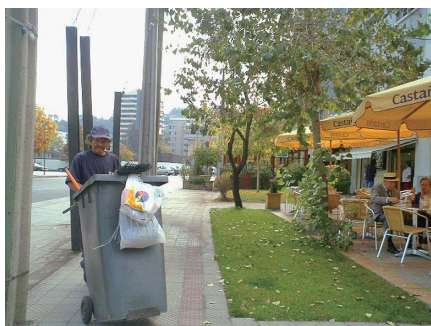


写真8, 写真9 上流地区のオープンカフェでくつろぐ老夫婦と清掃バイト中の男性